

きのこの森から

vol.8



文・写真=きのこ写真家

新井 文彦

森とハイマツと砂礫

雌阿寒岳 山中

きのこの森

【表紙写真】

コケの間からひょっこり姿を現したヌメリササタケ

【1-2ページ写真】

太いハイマツの幹の合間にたくさんのきのこの姿が

阿寒摩周
国立公園の最高峰

標高1499mの雌阿寒岳は、
気象庁などによる常時観測対象火
山であり、常に数カ所から噴煙を
上げている。阿寒摩周国立公園内
の最高峰で、釧路市と足寄町にま
たがってそびえている。『日本百名
山』の著者である登山家の深田久
弥は、雌阿寒岳と雄阿寒岳を「阿
寒岳」と総称し、両方登るつもり
だったが、噴火の影響で雌阿寒岳
は登山禁止だったため、実際に
登ったのは雄阿寒岳のみだった。
昨今の百名山ブームのなか、登山

者が「阿寒岳」として登っている
のは、雄阿寒岳に比べて標高が高
く登山時間が短い雌阿寒岳のみ
の場合が多い。

雌阿寒岳の登山口は、阿寒湖温
泉、雌阿寒温泉、オンネトー国設
野営場にあるが、人気があるのは
雌阿寒温泉を往復するルートだ。
体力に余裕がある人には、雌阿寒
温泉から登り、雌阿寒岳と阿寒富
士の両ピークを踏んでオンネトー
国設野営場へと下り、道道949
号あるいはアカエゾマツの森の中
の遊歩道歩いて、雌阿寒温泉に
至るルートをおすすめする。

この辺りの森林限界（高山など



ドクベニタケはマツなどと共生する菌根菌

したがって、この森では、周囲を見渡せば、必ずきのこの姿が目に入る。夏から秋にかけての地面からは、ドクベニタケやテングタケなどの毒きのこ、シヨウゲンジやヌメリササタケなど食用になるきのこ、ヒナノヒガサやヒメコガサなどコケや地衣類の間から生える極小きのこなど、種類こそそれほど多くないが、たくさんのきのこが発生する。眼福だ。



ハイマツ帯から砂礫帯へ

登山道をさらに進む。3合目に至る間、ハイマツが目立ち始めると同時にアカエゾマツが徐々に細く小さくなる。もうすぐ森林限界だ。4合目のすぐ下でアカエゾマツの姿はなくなり、その名の通り地面を這うように横へと伸びるハイマツが主役になる。一気に視界

が開け、眼下に紺碧のオンネトーや広大な樹海を見ることが出来る。6月下旬から9月上旬にかけては、ハイマツの合間に広がる砂礫で、雌阿寒岳の名を冠した、メアカンキンバイ、メアカンフスマを始め、イワブクロ、マルバシモツケ、コマクサなどの高山植物が、可憐な花を咲かせる。ハイマツの樹下は幾重にも落葉が敷き詰められた土壌になっており、アマタケ、ドクベニタケ、マツタケモドキ、ホウキタケの仲間などが発生する。以前、ハイマツの周囲



山麓を覆う軽石の間からアマタケが発生!



アカエゾマツの純林

いざ、雌阿寒岳へ。雌阿寒温泉登山口は、立派なア

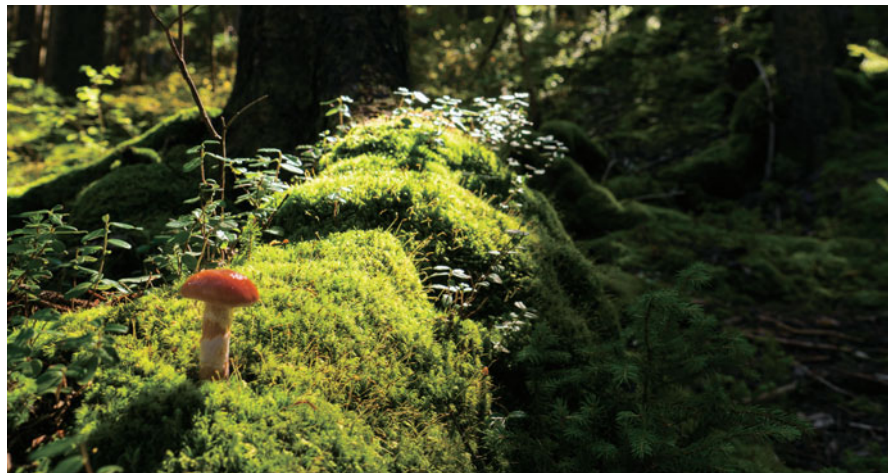
カエゾマツの森の中であり、1合目までは傾斜がややきついですが、2合目の手前からゆるむ。こちらの目的はきのこ鑑賞なので、周囲の森林風景を楽しみつつ、立ち止まったり座ったり、のんびり歩けばいい。2合目付近に広がる平坦な場所

にある軽石や砂礫の間から、アマタケが発生しているのを見つけた時には、その環境適応能力、生命力の強さに、ただただ感動した。8合目からはハイマツの姿もほぼなくなり、砂や小石ばかりの活火山らしい荒涼とした風景が広がる。さすがにきのこの姿を見ることはないが、コケや地衣類はそこかしこで石や岩にへばりついて生きている。

雌阿寒岳の頂上から北東方向には、下り斜面の途中にぽっかり空いた巨大な穴からもくもく上がる噴煙越しに、阿寒湖が見える。右の大きな山は雄阿寒岳だ。手前の湖岸に阿寒湖温泉の建物がちらほらと確認できるが、あとは見渡す限り、森、森、森……。きのこがひっそりと生きている、広大な樹の海が広がっている。ちなみに、雌阿寒岳、雄阿寒岳の4合目からは、国立公園の特別保護地区なので、植物はもちろん、きのこなども採取することはできない。

では、空に向かって真っすぐ伸びるアカエゾマツの巨木が、何百本、何千本と立ち並び、その絶景は筆舌に尽くしがたい。赤っぽいアカエゾマツの幹の色に対し、周囲の地面、大きな石や岩の上は、濃淡さまざまな緑色で覆われている。そう、コケや地衣類だ。気が遠くなるような昔の話だが、この辺りは、雌阿寒岳の噴火により、溶岩や火山灰などが積もった不毛の大地だった。そこへ先駆植物といわれるコケや地衣類が姿を現し、樹木の種の受け皿となり、いつしか貧栄養に耐え硫酸にも強いアカエゾマツが芽生え、成長し、自らの遺骸や堆積した落葉などがやがて土壌をつくり、長い時間をかけて、今ある森をつくってきた。そして、多くの人は想像すらしないかもしれないが、樹木と互いに栄養をやりとりして共生する菌根菌、生物遺骸を分解して無機物へ還す腐生菌など、きのこや菌類の存在が、森の成長・発展に大きく影響しているのだ。

きのこなど菌類の働きで倒木は無機物に還っていく



〈あらい ふみひこ〉
1965年群馬県生まれ。きのこ写真家。北海道の阿寒湖周辺、東北地方の白神山地や八甲田山の周辺などで、きのこや粘菌(変形菌)など、いわゆる隠花植物の撮影をしている。著書に『きのこの話』『きのこのき』『粘菌生活のススメ』『森のきのこ、きのこの森』『もりのほうせきねんきん』など。書籍、雑誌、WEBなどにも写真提供多数。

①きのこには、食べると中毒事故を引き起こすものもあります。実際に食べられるかどうか判断する場合には、必ず専門家にご相談ください。